

選抜学生による ピアノコンサート

2022年 6月11日 [土]

14:00 開演 | 13:30 開場

洗足学園音楽大学
シルバーマウンテン 1F

△新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。
- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

主催：洗足学園音楽大学・大学院

PROGRAM

～2022年度特別選抜演奏者～

J.ブラームス／ピアノソナタ 第3番 作品5 へ短調 第1楽章
Johannes Brahms(1833-97)/Sonate für Klavier no.3 op.5 1 Satz
木元 るり子(学4)

E.グラナドス／演奏会用アレグロ
Enrique Granados(1867-1916)/Allegro de concierto
西村 ゆき乃(学3)

R.シューマン／アレグロ 作品8
Robert Schumann(1810-56)/Allegro op.8
山口 琴世(学3)

F.リスト／ハンガリー狂詩曲 第12番 嬰ハ短調
Franz Liszt(1811-86)/Ungarische Rhapsodie no.12
中村 春花(学4)

-----休憩-----

～ピアノ・プロフェッショナル・パフォーマンスクラス～

M.ラヴェル／ソナチネ
Maurice Ravel(1875-1937)/Sonatine
柳田 菜々子(学1)

J.S.バッハ／フランス組曲 第1番 BWV.812 二短調 アルマンド
Johann Sebastian Bach(1685-1750)/Französische Suiten no.1 BWV.812 d-moll Allemande

F.リスト／ハンガリー狂詩曲 第7番 二短調
Franz Liszt(1811-86)/Ungarische Rhapsodie no.7
瀬沼 貴寛(学2)

F.リスト／バラード 第2番 口短調
Franz Liszt(1811-86)/Ballade no.2
林 美夢(学3)

L.v.ベートーヴェン／ピアノソナタ 第4番 作品7 変ホ長調 第1楽章
Ludwig van Beethoven(1770-1827)/Sonata für Klavier no.4 op.7 1 Satz

D.スカルラッチィ／ソナタ K.87 口短調、ソナタK.175 イ短調
Domenico Scarlatti(1685-1757)/Sonata K.87 h-moll, Sonata K.175 a-moll

F.ショパン／12の練習曲 作品10 第8番 へ長調
Frédéric Chopin(1810-49)/12 Etudes op.10 no.8 F-dur

A.スクリャービン／3つの練習曲 作品65 第3番
Aleksandr Scriabin(1872-1915)/3 Etudes op.65 no.3
若佐 太郎(学4)

木元 るり子(学4)



香川県出身。香川県立坂出高等学校音楽科卒業。
2022年度特別選抜演奏者認定。
これまで児島祥子、佐々原洋子の各氏に師事。
現在ピアノを清水将仁氏に、室内楽を浦壁信二氏に師事。

J.ブラームス/ピアノソナタ 第3番 op.5 へ短調 第1楽章

全部で5楽章からなるこのソナタは、1853年ブラームスが20歳の若さで作曲したものである。この年、ブラームスはデュッセルドルフに住むシューマンの元を訪れ、この作品を見せたといわれている。以前からシューマンに作品を送り助言を求めていたブラームスであったが、シューマンの反応は好ましいものではなかった。しかし、共通の友人の紹介によりシューマンとの面会が叶い、その際持参したこのピアノソナタ第3番はシューマンから高い評価を得た。形式としてのソナタは、ベートーヴェンが創作した32曲のピアノソナタによって完成され、全盛期を過ぎたと当時思われていたが、ベートーヴェンを尊敬していたブラームスは彼の古典的な技法と自らのロマン的な情緒性を融合させ、このピアノソナタ第3番を完成させた。ピアノソナタ第3番の完成後、ブラームスは「自分の持つ全てのソナタ形式の手法を出し尽くしたため、これ以上ピアノソナタを書く必要はない。」と言ったとされており、これが彼の最後のピアノソナタとなった。

第1楽章は、ピアノの音域を広く用いた力感の溢れる第1主題で始まる。この主題は、当時のソナタと比較すると非常にインパクトの強いものであった。続く第2主題では、内向的でありながらも叙情的で美しい旋律が奏される。展開部では主に第1主題が扱われ、再現部につながり、曲の最後には重厚な和音の響きが連続して豊かな終結となる。管弦楽を思わせるスケールの大きさは、彼の後の目標である交響曲への展望が見える。



西村 ゆき乃(学3)

千葉県出身。

第11回国際ジュニア音楽コンクールピアノF部門第1位。

第38回日本クラシック音楽コンクールにて、全国大会奨励賞受賞。MENAピアノグレード検定3級、奨励賞受賞。

2022年度特別選抜演奏者認定。

これまでにピアノを上野範子氏に師事し、現在江崎昌子氏、室内楽を古川原広斉(裕仁)氏に師事。

E.グラナドス／演奏会用アレグロ

エンリケ・グラナドスはアルベニスと並んでスペインの民族主義楽派を代表する作曲家である。スペインの作曲家の音楽にはフラメンコなどの民族舞踏的なリズムや旋律を飾る粋な装飾があり、エキゾチックな香りを漂わせている。アルベニスはそのような民族色の強いスペイン音楽を創り出していた。一方グラナドスは歌心に溢れた親しみやすい旋律を作曲し、人々の心を魅了した。そこには激しい情緒や物語性を感じられるシューマンなどのロマン派の影響が色濃く表れている。またその色彩感からは、ドビュッシーを思わず印象派の音楽も感じられる。

「演奏会用アレグロ」は1903年に行われたマドリード音楽院による卒業課題曲コンテストで一等賞を獲得した作品である。グラナドスの後期の作品に見られる華やかさ-リストを彷彿とさせる技巧的なオクターヴやアルペジオ-を散りばめながら、仄かな暗さ-ショパンの美しくも切ないピアノリズム-を併せ持つ。曲の冒頭から右手の細やかなアルペジオの動きとそれを支える左手の動きが現れ、その後メランコリックな旋律がたっぷり歌われる嬰ト短調へ、次いでト長調へと切り替わり…とテンポの変化や転調などによっての場面転換が頻繁になされる。さらに、ギターを模したアルペジオの動きとロマンティックな旋律が奏でられる場面が交互に現れることが多いのもこの曲の特徴である。ロマン派音楽とスペインの民族音楽が心地よく溶け合った魅力的な作品であると思う。



山口 琴世(学3)

愛知県立豊丘高等学校卒業。ヤマハJOCハイライトコンサート in NAGOYA 2014出演。2014年ヤマハピアノフェスティバル三河本選会C部門奨励賞。第25回東三河PTCピアノコンクール中学生フリーステージ部門銀賞。

第34回JPTAピアノ・オーディションC部門奨励賞。

2017年ピティナ・ピアノコンペティション中部日本E級地区本選出場。2021年日本演奏家コンクール大学生の部入選。

2021年度、2022年度特別選抜演奏者認定。

アンサンブル・スタディ・クラス在籍。現在、清水将仁、武内俊之の両氏に師事。室内楽を清水将仁氏に師事。

R.シューマン／アレグロ作品8

ロベルト・シューマンは1810年6月8日にドイツのツヴィッカウに5人兄弟の末っ子として生まれた。書店、出版業を営むかたわら著述家でもあった父親のもと、早くから音楽や文学に親しみ、作曲や詩作に豊かな才能を示した。ライプツィヒ大学の法学に進むも、ピアニストを目指しフリードリヒ・ヴィークに師事する。しかし、指の故障によりピアニストの道を断念し、作曲家となる。ヴィークの娘でピアニストのクララとの恋愛と結婚は、シューマンの創作活動に多大な影響を及ぼした。その作品はピアノ曲をはじめ室内楽曲、歌曲、交響曲、そして合唱曲などといった幅広い分野にまたがり、特にピアノ曲と歌曲において評価が高い。

アレグロ作品8は、1831年末から1832年2月末にかけて作曲され、フンメルのパiano・ソナタ第5番作品81を土台としていて、当初ソナタの第1楽章として創作が始められたと言われている。ロマン派において新しいソナタ形式の構成を追求した意欲的な作品だが、構要素の点では古典的といえるだろう。

全体は序奏について提示部と展開部と再現部、コーダからなり、2つの主題を持つ。この作品で注目されるべきはその転調にあり、主調の口短調、第2主題の二長調から、その後は従来の近親関係調による転調の手法から離れてめまぐるしく転調を繰り返していく。

様々な調性から生まれる豊かな色彩の遍歴が、この作品の魅力である。



中村 春花(学4)

千葉県出身。千葉県立津田沼高等学校音楽コース卒業。

2021年洗足学園主催、竹内聡氏指揮、「電子オルガンによる管弦楽曲とピアノ協奏曲の夕べ」にソリストとして出演、グリーグのピアノ協奏曲を演奏。

第23回日本演奏家コンクール大学生の部入選。

2022年度特別選抜演奏者認定。

現在ピアノを田中美穂、河野元の各氏に、室内楽を清水将仁氏に師事。指導者養成クラス在籍。

F.リスト／ハンガリー狂詩曲 第12番 嬰ハ短調

幼年時代ハンガリーの片田舎に住んでいたリストは、母国の民族音楽やジプシーの音楽に終生愛着をもち続け、19のハンガリー狂詩曲を完成させた(20番は未完のまま終わっている)。ジプシー民族とは北インドに起源を持つ移動型の民族で、中近東、北アフリカ、ヨーロッパなどで生活している。各地を放浪し、音楽の演奏やダンスなどで生計を立ててきた彼らによってもたらされた音楽は、現地の音楽に影響を与え、また影響を受け、相互に発展してきた。ジプシーの音楽の大きな特徴は、テンポや強弱の激しい変化、細やかなリズムや奔放な装飾、グリッサンドの多用などで、序奏風なゆっくりしたラッサン(Lassan)と、それに続く急速な火がついたようなフリシュカ(Friska)の2部分で構成されることである。またジプシーの音階(ハンガリー音階)は、他にはどこにもない異なった感情を醸し出す旋法の一つで、和声的短音階の第4音を半音高くして2つの増二度音程を持つ独特の音階である。ハンガリー狂詩曲では、ツィンバロムという、台形の響板に張られた弦を二本のバチでたたいて演奏する楽器の効果があちこちで用いられ、曲に見事な雰囲気を与えている。

第12番嬰ハ短調は1853年に作曲、出版された。Introduzione(導入部)と記されたMesto(悲しく)の部分に始まり、この序奏が一段落すると冒頭に示された主題がその明瞭な姿を現す。Adagio(緩やかに)の部分が終わると、Allegro Zingarese(快活に、ジプシーのよう)となり、いかにもジプシー風な旋律が現れる。Dolce con grazia(甘く、優雅に)、Dolce grazioso(甘く、優美に)と続き、カデンツァの後、Stretta Vivace(緊張感を高め、生き生きと)の終曲となり様々な楽想は自由に姿を変え、音の狂乱が続く。最後に1小節だけAdagioになり、主題が再現されるがすぐにPresto(急速に)となって劇的に楽曲を閉じる。作品はヴァイオリニストのヨーゼフ・ヨアヒムに献呈された。



柳田菜々子(学1)

東京都出身。4歳よりピアノを始める。

東京都立小山台高等学校卒業。

第10回Kジュニア&学生音楽コンクールピアノ部門高校生の部
優秀賞受賞。

現在、蓼沼恵美子、浦壁信二の各氏に師事。

ピアノ・プロフェッショナル・パフォーマンスクラス在籍。

M.ラヴェル／ソナチネ

この作品はラヴェルが音楽雑誌主催の作曲コンクールのために書いた曲で、1903年から1905年にかけて作曲された。同時期の作品として、「鏡」がある。

3楽章構成で、第1楽章の第1主題が第2、第3楽章にも和声やリズムを変形させながら登場し、循環主題風に扱われている。「ソナチネ」という題名はラヴェルの古典形式美への傾倒を示している。どの楽章も短くコンパクトだが、ラヴェルらしい繊細で緻密な美しさが凝縮されており、彼の作曲家としての名を世に広めた一曲としても知られる。

第1楽章／ 中庸な速さで

簡潔なソナタ形式の曲である。内声の優美なパッセージに、両手がユニゾンで歌うメロディーと重なる。湖面が小さく揺れているような、穏やかな情景と、大きな波が押し寄せるような激しい場面がせめぎ合い、瞬時に切り替わることにより劇的な起伏を感じさせる。また、提示部、展開部、再現部と、ほぼ正確な3分割になっていることは、ラヴェルの綿密なこだわりであろう。

第2楽章／ メヌエット

トリオのないメヌエット。ステップを描写する細かいアーティキュレーションにより、優雅で上品なメロディーの中に弾むような可愛らしさを与えている。また光が反射しているような装飾音も特徴的である。

第3楽章／ 生き生きと

自由なロンド形式で書かれ、活発なパッセージが躍動する。機械的な左手のパッセージの上に火花が散るよう響く鮮烈な主題と、16分音符の中に自然に織り交ぜられた3連符が印象的である。静けさのなかでも常にエネルギーを持ち、さらに変拍子の登場によって、非現実的で不安定な世界観が演出されることも、この楽章の魅力である。曲の最後までその熱量は途切れることなく、交互に入れ替わりながら疾走を続ける16分音符と3連符によって、テンションが最大限に上昇し、走り切るように華やかに幕を閉じる。



瀬沼貴寛(学2)

上野学園高等学校卒業。2016年ピティナピアノコンペティション全国大会連弾ベスト11賞受賞。

2019年第1回室内楽ピアノコンクール高校生部門金賞。

2015年北本ピアノコンクール第2位及び教育長賞。

2019年第20回大阪国際音楽コンクールピアノ部門 Age-H 第2位。

現在、浦壁信二、鳥羽瀬宗一郎、泉ひろ子の各氏に師事。

ピアノ・プロフェッショナル・パフォーマンスクラス在籍。

J.S.バッハ／フランス組曲 第1番 BWV812 二短調 アルマンド

フランス組曲全6曲は、全てバロックダンスの様式に基づいて作曲されている。バロックダンスとは、17世紀初期にフランス宮廷を中心に栄えヨーロッパ中に広まっていったダンス様式である。当時の貴族達が理想とした、調和と秩序を保ち、感情や心情をさらけ出さず常に沈勇であることを基に、貴族のイデオロギーを反映させ宮廷社会において創り上げられた表現芸術である。アルマンドとは、ダンスステップの一種でフランス語の「ドイツ（人・語）の」という意味であり、ドイツの舞曲（Tanz）と称されるタイトルをフランス近辺で名称付けたことが始まりといわれる。しかしフランスにおけるアルマンドは、リュート音楽の発展と共に器楽曲としての様式がダンス様式から独立し、のちにこのスタイルはバッハをはじめとする様々な作曲家にも用いられるようになった。フランス組曲第1番のアルマンドは荘厳な面を持ち、旋律の美しさに加え、縦の和音の重なりを豊かにすることで、この上ない繊細な美しさを完成させている。

リスト／ハンガリー狂詩曲 第7番 二短調

リストは幼少期から両親によりその才能を見出され、10歳になる前に公開演奏会を、15歳ではピアノ教師をして家計を支えた。ピアニストとしては様々な国でコンサートを開き、その姿に失神する女性が続出したというエピソードはあまりにも有名で、人々を虜にする超絶的な技巧、魅力的な音楽性と容姿を持っていたとされる。その演奏技術の高さからリストは「ピアノの魔術師」とも呼ばれている。作曲家としても優れていたリストは、同時代のエクトル・ベルリオーズ、フレデリック・ショパン、ロベルト・シューマンらと親交が深く、音楽的にも彼らから大きな影響を受けた。数多くの才能に溢れていた彼は、自身の出生地であるハンガリー王国を祖国と呼び、ハンガリー人としてのアイデンティティを生涯抱いていた。かの地に実際に足を運び、ハンガリー民族音楽の研究を重ねた成果がこの曲集には込められている。この曲は、遅いテンポ（Lento）の前半と急速なテンポ（Vivace）の後半との2部構成で、ゆったりとしたテンポから徐々にテンポをあげ、最後は熱狂的に終わる一連の流れによって形成されている。前半はソロヴァイオリンを思わせる過度なまでの装飾、拍子感にとらわれない自由な楽想、後半はクラリネットやツィムバロムが加わり、技巧的なパッセージが繰り返され、曲は華やかな終わりを迎える。



林 美夢(学3)

東京都出身。3歳からピアノを始める。2016年ピティナ
ピアノコンペティション全国大会連弾ベスト11賞受賞。

2017年上野学園音楽中学校音楽科卒業。

2020年都立総合芸術高等学校卒業。

2021年洗足学園主催、秋山和慶氏指揮、「ピアノコンチェルト
の夕べ」に出演し、モーツァルトピアノ協奏曲第20番を演奏。

これまでに泉ひろ子、今野尚美、高木早苗の各氏に師事。

現在、泉ゆりの、鳥羽瀬宗一郎の各氏に師事。

ピアノ・プロフェッショナル・パフォーマンスクラス在籍。

F.リストノバラード 第2番

リストのバラード第2番は、ピアノソナタと同じ1853年に作曲された大作である。

ニューヨーク・タイムズのJ.ホロヴィッツ氏と大ピアニスト、クラウディオ・アラウ氏との
対話による「アラウとの対話」に、この作品はギリシャ神話のヘーローとレアンドロスの
物語に基づいて書かれた叙事詩、とある。

ヘーローというのは青年レアンドロスと恋に落ちたギリシャ神話の中に出てくる女神
アフロディーテの女神官だ。ヘレスポント海峡を泳いで渡ってくる彼のためにランプを
ともして毎晩彼を導いていたが、ある夜レアンドロスは嵐に巻き込まれ溺れ死んでしまう。
嘆き悲しんだヘーローは彼の後を追って海に身を投げる、という物語である。

冒頭に出てくる暗く流れる大河のような主題的なパッセージはヘレスポント海峡を泳ぐ
レアンドロスを描写している。遠くの方からじわじわと押し寄せてくる大波のような恐ろし
さを感じられる。唸るテーマと甘美なヘーローのテーマが交互に現れ、後半になるにつれ
膨大になっていく。終結部はレアンドロスの死の悲しみの歌を表しているといわれている
が、ヘーローが思い描いた回想とも捉えられる。



若佐 太郎(学4)

1998年生まれ。東京都出身。

2013年、東京音楽大学付属高等学校ピアノ演奏家コース入学。2016年卒業。

これまでにピアノを真継豊子、佐藤展子の各氏に師事。

現在は浦壁信二、泉ゆりのの各氏に師事。

ピアノ・プロフェッショナル・パフォーマンスクラス在籍。

L.v.ベートーヴェン／ピアノソナタ 第4番 op.7 変ホ長調 第1楽章

前の3つのソナタ（Op.2）と比べて規模が大きく、内容も充実している。発表当時は「愛する女」という副題で親しまれていた。第1楽章はソナタ形式で、8分の6拍子。シンコペーションとスフォルツァンドを多用していて、ソナタによるスケールの大きな表現を目指す意志が明確化している。

D.スカルラッチィ／ソナタ K.87(L.33) 口短調

4分の3拍子。楽譜上に速度表記の指定はない。陰影をもって歌う優美な旋律と控えめながら豊かな情緒により名曲とされていて、演奏会などでも多く取り上げられる。

D.スカルラッチィ／ソナタ K.175(L.429) イ短調

4分の2拍子。アレグロ。スカルラッチィのソナタの特徴の1つ、アッチャカトゥーラが主要な要素となっている。アッチャカトゥーラは、本来の和音構成音にない音を付け加えることで、一種のクラスターとも言える強調効果が生み出される。

F.ショパン／12のエチュード op.10 第8番 へ長調

「12のエチュードop.10」は、当時ヴィルトゥオーゾとして名を馳せていたフランツ・リストに献呈された。エチュード（練習曲）という名ではあるが、音楽的にも完成された作品で、演奏会でも頻繁に取り上げられる。第8番はA-B-A-Codaの3部形式で、軽やかかつ華やかで動きのある楽曲。英語圏では「陽光（Sunshine）」の愛称で親しまれている。

A.スクリャーピン／3つのエチュード op.65 第3番

1912年にスイスで作曲されたこの曲集は、神秘主義の時期と言われる後期の作品である。3曲ともスクリャーピン独自のシステムによる多調音楽であり、不協和音を如何に音楽的に美しく扱うかという点に焦点が絞られており、発表当時は勿論のこと現在でも斬新さを失っていない。第3番はPan Dia-tonicの和声を使い、それが複調になっているという複雑さであるが、非常に劇的で演奏効果のあるエチュードである。